

ユダヤ人の悲哀を謳い、陽は昇りまた沈む

屋根の上のヴァイオリン弾き

★ OUTLINE

帝政ロシア時代の寒村で、伝統を守り、貧しいながらも楽しく暮らすユダヤ人たち。やがて、勢力を増すロシア人の迫害に苦しみ、愛する村を後にする。華やかなミュージカルとは一線を画すシリアスなテーマなのだが、笑いと涙が満載の娯楽作に仕上がった。それも、5人の娘を持つ主人公テヴィエの愛すべきキャラクターゆえ。伝統に縛られず、自ら選んだ相手との結婚を決める娘たちに一喜一憂するその父親像と、一家が迎える過酷な運命に、思わず感情移入してしまうのだ。

初演でテヴィエを演じたのが、ゼロ・モステル。強烈な個性で鳴らしたコメディアンで、アドリブを自在に練

り出し、余裕たっぷりの名演で観客を魅了した。ただ彼が評価を独占し、ワシントン・シヨリの色合いを強くしてしま

まったのも事実。しかしモステルの降板後、彼より知名度が劣る役者が主演してからも、客足は衰えず続演されたのだ。作品の質の高さと、万人の心を掴む普遍性のおかげだろう。

ブロードウェイではその後、76年(モステル主演)と81年に再演。67年のロンドン初演と映画版(71年)でテヴィエを演じ好評を博した、トポール主演の再演版は90年に来日。その直後に、ブロードウェイでも公演を行った。以降は、日本でもおなじみのデヴィッド・ルヴォー演出で、04年にリバイバル。日本では、森繁久彌の主演で67年に初演後、再演を重ねている。

★ MUSIC

テヴィエの長女の結婚式で歌われるのが、〈サンライズ・サンセット〉。哀愁に満ちた旋律が美しい、本作最大のヒット曲だ。作曲はジェリー・ボック(1928〜2010年)、作詞がシェルダン・ハーニック(1924年)のコンビ。地味ながら、心に沁み入る佳曲を数多く放ち、『シー・ラヴズ・ミー』(63年)と並ぶ代表作となった。

実はボックとハーニック共に、親の世代が東欧からアメリカに移住したユダヤ人。楽曲に息づく民俗音楽風の曲調は、彼らの血の中に潜在するエッセンスだったのだ。テヴィエが、貧しい我が身を愚痴りながらも、ユーモラスに歌う(もし金持ちなら)や、村の酒



ブロードウェイ初演(1964年)でテヴィエを演じたゼロ・モステル(左)

Trivia



シェルダン・ハーニック

ゼロ・モステルに決定するまでに、テヴィエ役には、何人も候補が挙がった。作詞のシェルダン・ハーニックが、初演の舞台裏を振り返る。

「私たちは、ユダヤ人のコメディアン、ダニー・ケイ(映画「5つの銅貨」)に演技で欲しかった。でも彼に話が行く前に、奥さんに『主人は、5人の娘の父親を演じるほど年老いておりません』と断られた。作品が大ヒットしたら、考えを変えたいけれど(笑)。

面白いのは、フランク・シナトラがテヴィエ役に興味を持って、自らプロデューサーに電話したと聞きました。でも彼は、ダンディーな遊び人タイプでしょ。私たちの候補リストには、入りませんでしたね」

場で彼を中心に歌い踊られる(人生に乾杯)など、他にも優れた曲が多いが、白眉は幕開きの〈伝統の歌〉だろう。ユダヤ人特有の慣習や暮らしぶり、ユニークな登場人物を手際よく紹介し、これから始まる物語を観客に示唆するナンバーで、ジェローム・ロビンズ

のダイナミックなステージングもあって、ブロードウェイ史に残る見事なオープニングとなった。CDは、モステルの初演盤、トポールのロンドン初演とサントラ盤、映画でもおなじみのアルフレッド・モリーナがテヴィエに扮した04年の再演版録音、すべて輸入盤で入手できるが、やはりコミカルな中にペーソスを滲ませた、モステルの快唱が見事だ。📌

●作曲=ジェリー・ボック ●作詞=シェルダン・ハーニック ●脚本=ジョセフ・スタイン ●振付・演出=ジェローム・ロビンズ ●初演=1964年9月22日/インペリアル劇場 ●続演=3242回 ●日本初演=1967年9月3日/東宝/帝国劇場

トニー賞 ★64年初演=作品賞、楽曲賞、脚本賞、振付賞、演出賞、主演男優賞、助演女優賞、衣裳賞、プロデューサー賞、72年に特別賞 ★90年再演=再演賞

ワーズ & ミュージック

～ソングライターの仕事～

何と言っても、ミュージカルは楽曲ありき。20年代から、無数のソングライターたちが競って新作を発表し、今も親しまれているスタンダード・ナンバーの名曲を量産した。ここでは、50年代以降のブロードウェイで、数々の名作に関わってきたベテラン作詞・作曲家たちへのインタビューを交え、日本ではあまり知られていない作業工程や、仕事へ取り組み姿勢を紹介しよう。

ソングライターいろいろ

ブロードウェイの歴史を振り返ると、ソングライターの形態はいくつかに分けられる。まずはコンビ型。リチャード・ロジャーズ(作曲)とオズカー・ハマースタイン二世(作詞)が、この代表だ。そしてコール・ポーターやフランク・レッサー、後年はステイヴン・ソンドハイムのように、一人で詞と曲をこなす



ジェリー・ボック(左)とシェルダン・ハーニック(58年頃)

ワンマン型。さらに、作品によって異なる作詞&作曲家と組むケースも、もちろん多い。

本書に登場するソングライターで、コンビ型の代表格が、『屋根の上のヴァイオリン弾き』(P50参照)のジェリー・ボック(作曲)とシエルダン・ハーニック(作詞)だろう。よく詞と曲どちらが先かと言われるが、ハーニックはこう説明する。

「ジェリーは、とにかく引き出しの多い作曲家でね。『ヴァイオリン弾き』でも、原作を読むと次々とメロディーが浮かぶんです。それを録音したテープを聴きながら、私が歌詞を乗せて行くというやり方でした。しかし作業がある程度進むと、曲に縛られているような感覚に囚われる。その後は、私が先に歌詞を書いて、ジェリーに渡しました。ただどちらの方法でも、彼の曲の仕上がりは見事でしたね」

夫婦にも似た相方との不和

『キャバレー』(P58参照)や『シカゴ』(P70参照)のジョン・キャンダー(作曲)

とフレッド・エップ(作詞)は、また別のスタイルで楽曲を完成させた。キャンダーは語る。

「僕とフレッドは、必ず同じ部屋に籠って曲を作った。まず二人で、登場人物の感情を話し合った。時には、役に成り切って台詞を言ってみたりしてね。そしてフレッドが歌詞を思い付くと、僕がピアノを弾く。この即興のやり取りを交わしながら、同時にひとつの曲を練り上げ



ジョン・キャンダー(手前)とフレッド・エップ

る方法だった。だから曲を書く時は『キャンダー&エップ』という、一人の人間になったんだ」

ソングライターのチームは夫婦に似て、仲違いからコンビを解消するケースもある。キャンダー&エップは、エップの死去(04年)という形でやむなく活動を終えたが、ボック&ハーニックの場合は複雑だった。

『ロスチャイルド家』(70年)という作品で、演出家の起用をめぐってジェリーとまったく意見が合わなくてね。結局それが原因で、決別してしまっただけです。私は彼の作曲家としての才能に惚れ込んでいたので、その後もコンビ復活を懇願して、04年に一度だけ『ヴァイオリン弾き』の再演用に曲を作りました。私は嬉しくてね。引き続きコンビを続けたかったのですが、ジェリーは首を縦に振りなかつた……」

創作を続けるベテランたち

70年にボックと袂を分かった後のハーニックは、『レックス』(76年)で、作曲

家リチャード・ロジャーズと組んだ経験を持つ。『サウンド・オブ・ミュージック』(P42参照)などの心温まる楽曲からは想像もつかぬ、厳格かつ気難しい人柄で知られた巨匠だ。

「最初に歌詞を仕上げて、ロジャーズに見せる時は怖くてね(笑)。やがて曲が完成して、ピアノで聴かせてくれたんですが、これが実に美しい。私が感激してそつ伝えると、彼は肩の荷が下りた様子で、『実は、君に気に入ってもらえるか心配だったんだよ』……。あの御所が、私と同じように緊張していた。それから、すっかり打ち解けて仕事ができるようになった」

近年ハーニックは、作詞のみならず作曲と脚本も手掛けた、モリエールの戯曲『いよいよながら医者にされ』のミュージカル版を完成。「自分でも予想もしなかつたようなフレーズが閃くことがある。これがある限り、創作活動を続けたいですね」と語る。一方、「単純に曲作りに没頭できる、小劇場での仕事を楽しんでる」と満足するキャンダー。エップとの最後の作品『スコッツボロー』